『失楽園』における救済の教義

マルティン・ルターの良心論的視点に基づく死から生への転換

堀内直美

宗教改革の特徴であるマルティン・ルター(Martin Luther, 1483-1546)の「信仰によってのみ」(sola fide)を、ジョン・ミルトン(John Milton, 1608-1674)の『失楽園』(*Paradise Lost*, 1667)における神学思想の標語とする学者は多い。良心に語りかける神の言葉の内面的変化としての信仰は、ルターの神学思想の核心である。ルターは試練を良心における出来事として捉え、地獄の責め苦という中世的表象で心の内なる良心現象を詳述する。『失楽園』において、アダムとイヴが原罪という試練を神の恩恵によって信仰という「きみのなかに楽園を」(“a paradise within thee” 12.587)生じさせることへ変換する過程は、まさにルターの思想の世界、死の試練を通って生への転換を果たす、つまり徹底的な絶望と破滅のどん底における悔い改めによって生じさせられた恩恵による信仰が行うわざである。アダムとイヴの絶望の深淵からの呻きは、神との出合いの時であった。本発表では、作品におけるアダムとイヴの救済の過程をルターの良心論的視点を通して考察し、ミルトン神学との表現の類似性を指摘しつつ、第 3 巻で御父が語る人間の内に置く「審判者」(“My umpire” 3.195)としての「良心」(“conscience” 3.195)は、ルターの思想における福音によって生まれ変わった超道徳的良心に一致することを論証した。良心についての研究は、すでにアブラハム・ストール(Abraham Stoll)によって行われているが、本発表では、ストールの人間の内面的良心現象の解釈について補足することで人間の心の変化を明らかにする。

良心の歴史、ルターの思想の概括、先行研究は紙面の都合上割愛し、作品における人間の内面の変化や表現の類似を検討する。はじめに、原罪を犯した後アダムがその苦悩を独白する場面を見てみよう。

　　おまえがこう望み、こう恐れる
からには、罪を逃れる望みは断たれ、
過去においても、未来においても、類いなき
悲惨におちいるその宿命は、まぬがれがたい。
罪とその裁きは、サタンのみのふさわしい。
ああ、良心よ！なんという恐怖･戦慄の淵に
きみはわたしを陥れたことか。逃げようと
すればするほど、深みにはまり込む大淵に！(10. 837-44)

842 行目の「良心」(“conscience”)は律法によって糾弾された良心である。試練は人間の良心を根底的に震撼し、謙虚な良心も神の審判の下に全く砕かれる。ここで、ミルトンはこの恐怖に戦く状態を深淵のイメージを使って描いている。アダムはまさにこの罪の深淵に飲み込まれ死にそうな状態なのである。ルターは『第二回詩篇講解』(1519-21)の第六篇において「極端なかつ完全なる苦悶の中で死と地獄との格闘が行われている･･････御霊のほかに誰も聞きも見も感じもしないところの霊の外部で且つ霊を越えたかの最高の脱自において行われている」(Luther 5, 202, 22ff.)と言う。この霊的試練は、人間の理性と感性を超えた領域で「隠れたる神」と良心との格闘において脱自的に生じる(金子 319)。ルターもまた深淵のイメージを用い「ではどこからわれわれを弁護するものを得るのか･･････キリストが償いたまい、義であり、私の防御であり、私のために死に給うて、彼の義を私の義とし、私の罪を自分の罪とされた･･････私の罪は･･････彼の義の無限なる深淵の中に呑み込まれている」(Luther 56, 204, 14ff.)と神の義に言及する。「義の無限なる深淵」が死から生への転換を起こす出口であるなら、いかにして人間は神を見つけることができるのか。ミルトンはその様子を次のように描く。

かれらはこのように心ひくく悔い改めて、
祈っていた。これも贖罪所から、人間の
悔い改めに先だつ恩恵が降りて、ふたりの
胸から石を取りのぞき、そのあとに、再生の
新しい肉を植えつけられたからであって、
祈りの霊が吹きこんだ呻きは、言い知れぬ
息を吐き、声高き雄弁よりも速く、天へ

翔る。(11. 1-8)

ルターは上述の引用の後半で「御霊は言い表わしがたい呻きをもって聖徒のために祈求し、且ついわば神自身と格闘している」(Luther 5, 202, 22ff.)と言う。ミルトンはこの御霊を「先だつ恩恵」(“Prevenient grace” 11.3)として描いていると思われる。この恩恵は悔い改めに先立ってアダムの心へ降りてくる。「心ひくく悔い改めて」(“they in lowliest plight repentant stood” 11.1)という表現で自己否認(extrema abnegation)を表わし、「胸から石を取りのぞき」(“had removed / The stony from their hearts” 11.3-4)で脱自がおこり、脱自的に超越する信仰は「新しい肉」(“new flesh” 11.4)として描かれているのではないだろうか。しかしペーテルズが言うように、このような自己放棄は、神に向かう人間の愛の運動から生じる行為として遂行されるのではなく、我々の良心に対する神の攻撃とし受苦されているのである(金子 393)。「声高き雄弁」(“loudest oratory” 11.8)ではなく、分節されない言葉、すなわち「言葉に表わせない呻き」(金子 393)が父なる神を呼べるのである。ルターは「言葉でもって人はそれを語れず、ただ心の激しい動きによる」(Luther 40, I, 586, 7)と言う。この呻きは「祈りの霊」(“the spirit of prayer” 11.6)である聖霊がアダムとイヴに「吹き込んだ」(“Inspired” 11.7)「呻き」(“sighs” 11.5)に一致すると思われる。信仰へ至るには、人間の内に恩恵を実現しなければならず、そのために人間が自己中心的態度と自律的主体性を全面的に変革する必要がある。この変革、つまり心の転換は、メタノイアとしての悔い改めによって起こる。ルターはこれによって人間が「信じるように成る」(Luther 57, HS. 215, 20)と考える。つまり、人間は神の恩恵と御霊の創造的働きにより変革され、信仰により神の義を受容し義とされる。これが信仰義認である。ミルトンの語りはルターの信仰義認を踏襲していると思われる。

ルターとミルトンの信仰義認の類似性への理解は、ミルトンの「良心」(“conscience” 3.195)を解釈するために必要と思われる。そこで最後に、第 3 巻の神の言葉へ戻り、この「良心」を検討しよう。

祈り、悔い改め、正しい従順は、純粋な
意図の努力にとどまったにせよ、それにたいして
わが耳が鈍ることも、目が閉ずることもない。
わたしは導者として、かれらの心にわが審判者
＜良心＞を据えよう。かれらがこれに聞くならば、
あたえられる光を頼み、光から光へと達し、
終わりまで耐え忍びつつ、無事に救いに至りつこう。(3. 191-97)

ルターは『修道の誓願について』(1521)の中で良心の定義を試みている。彼は「良心とは行為する力ではなく、審判する力であり、これによりなされた行為は判定されるのである」(Luther 8, 606, 32ff.)と言う。つまり、信仰により生まれ変わった良心は、実質的道徳の原理を含まないが、「審判者」としてポール・ティリッヒ(Paul Tillich)の言う超道徳的性格をもつ。彼は「ちょうど絶望的良心が道徳的領域以下であったのと同じように、喜びに満ちた良心は道徳的領域よりもはるか以上に高いものになる。ルターの意味における『恩恵による義認は』は『超道徳的』良心が創造されることを意味する」(ティリッヒ 103)と述べている。その神学思想で「神に敵対して神に逃れること――は信仰の最も困難なわざである」(Luther 5, 204, 21ff.)とルターが言うように、神の試練を受けた良心は、聖霊の助けで信仰により生まれ変わり、神の言葉を理解し、われわれの行為が神の意思に一致するかどうかを審判する働きを持つようになる。ミルトンの描く「審判者」(“My umpire” 3.195)としての「良心」(“conscience” 3.195)は、ルターの良心論的視点におけるこの福音によって生まれ変わった超道徳的良心に一致するのではないだろうか。

＊ミルトンの日本語訳は新井明の『楽園の喪失』に、ルターの日本語訳は金子晴勇の『ルターの人間学』に負っている。尚、Luther に続く数字は巻・頁・行を示し、I は第一部を HB.はヘブル書講解の部分を示す。

引用文献

Luther, Martin. *D. Martin Luthers Werke.* Kritische Gesamtausgabe (Weimar Ausgabe) 5, 8, 40, 56, 57 Bands, Ed. Hermann Bohlaus Nachfolger, Weimar: Akademische Druck u. Verlagsanstalt Graz, 1964. Print.

Milton, John. *Paradise Lost.* Ed. Alastair Fowler. 2nd. ed. Harlow: Pearson, 2007. Print.

Stoll, Abraham. *Conscience in Early Modern English Literature.* Cambridge: Cambridge UP, 2017.Print.

金子晴勇　『ルターの人間学』創文社、1975 年。

ティリッヒ、ポール　『道徳と宗教』谷口美智雄訳　新教出版社、1965 年。

ミルトン、ジョン　『楽園の喪失』新井明訳　大修館書店、1983 年。